

## 遊牧がモンゴル経済を変える日

著者	小長谷 有紀
発行年	2002-11-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4581">http://hdl.handle.net/10502/4581</a>

さいごに

## 新しい経済の可能性をさぐる

小長谷有紀

二〇世紀の初頭、旧ソ連に続いて世界で二番目に社会主義を選択したモンゴルは、およそ七〇年後に社会主義を放棄した。モンゴル国は、二〇世紀において社会主義化とその放棄という二つの大きな人類史のうねりを経験したのだった。

社会主義時代、モンゴルでは三つの大きな変革もたらされた。遊牧の社会主義集団化と、農業の導入と、都市の建設である。草原世界に存在していた遊牧を変えること、ほとんど存在していなかった農業と都市をつくること、と言ってよいだろう。

社会主義時代以前において、遊牧民のあいだにあった経済格差は、社会主義集団化が完成するとともに消えてゆく。ただし、大規模な家畜所有者であった寺院の場合、所有する家畜は多くの遊牧民に委託放牧されていた。遊牧民の側に立ってみると、放牧を担当する家畜の主が寺院からネゲデル（牧畜組合）に変わったただだと極言することもできる。す

なわち、社会主義化といっても、所有関係にともなう生活の実態は大きく変わらなかったと思われる。むしろ変革が進んだのは、都市との関係における経営的側面であった。畜産物の積極的な流通が進んだのである。

モンゴルの二〇世紀は草原部から首都へと物質の大きな流れが形成された時代にほかならない。まず、人そのものが移動した。草原部は都市人口を産み育てるゆりかごであった。家畜に関する生産物では、筆頭にヒツジ肉をあげるべきであろう。都市に居住する人びとに食料を供給する目的で、ヒツジの群れが生きたまま町へと運ばれた。牛の群れも同様に、ハムや缶詰に変身すべく都市の工場をめざして移動した。秋になると見られる家畜のこうした移動は、それ自身が納税システムであり、流通システムであった。家畜が肉に変わるときに生産される毛皮も、こうして首都へと移送されていたことになる。

家畜をほふることなく獲得できる畜産物として、毛と乳がある。毛はトラックで首都へ運ばれる一方で、乳についてはもっぱら酪農場が建設され、搾乳を専門とする遊牧民が地方から集められ、乳加工工場へと集められるようになった。

ありとあらゆる畜産物が地方から都市へと集められるシステムが、社会主義時代に建設されたと言ってよいであろう。モンゴルにとって二〇世紀の社会主義とは、それまで個人経営活動にすぎなかった遊牧が、国家の産業となっていった一つの時代だったのである。

そして時代は過ぎ去った。

市場経済への移行期に、こうした過去の流通システムはほとんど絶滅したといっても過言ではない。結局、遊牧民は個人経営の単位に解体されてしまい、ほとんど個別的に流通に取り組まなければならなくなった。そうなると、市場からの距離が大きな変数として意味をもつ。首都や国境貿易の拠点に近い地域では、買いつけ商人もやってこようが、市場から遠い地域では、まったく現金収入のチャンスが途絶えてしまう。広大な草原に分散していることを是とする遊牧の論理が、市場経済にとってはいかにも不利にはたらくようになってしまったのだった。

こうした根本的な問題を解決する方法は、いくつか考えられよう。

たとえば、中国内蒙古自治区のように、遊牧民を定着化させるという方法もある。しかし、その結果、どのような生態環境の破壊が生じるかという点までも含めて、先行する事例である中国内蒙古自治区から学んでおくべきである。

次に、遊牧民が携帯電話を片手にして市場の情報入手し、自ら移動して市場へ売却する行動を促すという方法もあるだろう。しかし、それは市場経済がある種の経済的技法であるという単純な前提に基づいている。売り値を聞いて行動するという選択の自由が提供されても、草原のなかの広大な距離が不利にはたらくという根本的な問題を解決すること

にはなるまい。

そこで共同出荷というシステムが重要になってくる。けれども、それでもまだなお分散型の遊牧文明と市場経済が両立することは困難であるかもしれない。

遊牧を市場経済といかにうまく結合させるかという、この国のもっとも大きな課題は、最終的に、市場経済がこれからも人類史上最後の経済システムでありえるのか、という問いにつながるように思われる。

そもそも現時点での最終到達点にすぎない制度が、将来的に永続する保証はまったくない。レスター・ブラウンが提唱するように、「エコ・エコノミー」がこれからの人類の模索すべき新しい経済システムであるとすれば、そこをゴールに考えることもできよう。市場経済に代わるべき新しい「環境経済システム」となら、遊牧文明はその発祥地になりうる可能性さえ秘めている。なぜなら、遊牧はすぐれて環境指向の生業システムでありつづけてきたからである。

これまでのような企業の単純な利益追求とは異なり、非利潤型の持続的な経済システムは、こうした異質な文明から生まれるかもしれない、と思う。